

社内でリアルタイムの会計処理。税理士は会社の主治医にしよう!

経営危機に陥ったからと云って駆け込んでくる中小企業の経営者から、過去五年間の決算申告書と直近の試算表を見せていただく。ひどいときは会計事務所に行かなければ決算書はないという場合さえある。直近の試算表を見せてくださいとお願いますと、手元には三ヶ月どころか半年以上も前の資料しかない。

「何故かと訊ねる「伝票をまだ先生の事務所に渡していないから」に始まって、「税理士に顧問料を支払っていないから」という答えが返ってくる。税理士が悪いのか、私には相互に責任があると思えない。

問題を抱えた多くの中小企業の財務資料を診ていて感じるのは、中小企業だからこそリアルタイムな経営指導が必要だということだ。中小企業経営者には決算書や試算表の数字を明確に読み切れない人が多い。社長たちは税理士を頼りにしていることも確かだ。

中小企業経営者に対して、一刻と変化する経済環境に対応していくためには自分の会社の経営状態を常にリアルタイムで捉えているべきであること。税理士の影響力は大きい。

経営者の命綱：試算表 会計処理はリアルタイムに!

R.F.C

リスク・カウンセラー & ファイナンシャル・カウンセラー

Information & Report

2005.04.26 Vol.2005-04

【ついでに雑記】
 鍾馗の植ゑ込みにはキリシマツツジが花を咲かせ始めている。この花が咲く頃にはタケノコ掘りの最盛期だ。公園の端にある竹林にもタケノコが十センチくらい頭を出し始めた。竹は二三年目の竹の根元生えるタケノコが美味いのだ。節のところが白く粉があるのが目安で四年を過ぎた節のところが黒くなる。地下五センチのところに伸びている鞭根から新芽を出すのだが、土中から芽が出ない若い内、探して当てるのはなかなか難しい。竹の幹から伸びたための枝と同じ方向に鞭根が伸びているらしい。タケノコは好物だ。特にタケノコわかめの煮物は絶品だ。でも、この季節になると、産毛をとった柔らかな竹の皮に梅干しを包んでしゃぶつていたり、やがて竹の皮が紅く染みよりに染まってくる。嬉しかった。酸っぱくて懐かしい。遠い昔の思い出。(細野)



「会計事務所は入力処理業? 会計ソフトは企業を映し出す「鏡」だ!

「会計事務所は顧問料をいくら支払っていますか?」と中小零細企業の社長に訊ねるとおおむね三万円、二十万円、少額の支払をしている人の方が会計事務所に対して不満を持っている傾向があるようだ。

大企業が安定性の高い四輪車であれば、中小零細企業は安定性の悪いバイクのようなものだ。四輪車では何の問題にもならないような小石のような障害物も、バイクにとつては転倒を引き起こすことさえある。常日頃からリアルタイムで会計処理をしておくことは大切なことなのを社長に自覚させてほしいのだ。

だからこそ、顧問先から伝票があがってこないのがあってはキツくない理由とか、伝票があがってこない理由を明確にしておくべきであると思う。

「経営上何か問題が起きたのではないかと」

「経理担当者」に問題が生じたのか? 「会計事務所」として顧問先のトラブル要因として心配になることは山ほどあるはずだ。社長は顧問契約している理由があると考えられる。

その不満は、「伝票を渡して試算表を作ってくれよ!」「おまけに高い決算料を要求される!」「自分達が経営資料に対して無関心であることを棚に上げて会計事務所を「会計伝票の入力処理業者」のように考えている節があることも事実なのだ。受けるために資料の提出を求められたときだけは税理士様々だ。何と云っても「決算書」または直近の「試算表」が必要になるからだ。

会計事務所との関係が何処でそんなことになったのかと云えば、スタートの段階から既におかしいのだ。まず経営者は「財務諸表」を読めることが必須条件であること。読めなければできあがった「財務諸表」の内容について、どんなに時間をかけてでも専門家からきちんとしてアドバイスを受けることである。明日の経営のためには、会社の今日の数字をリアルタイムにきちんと知っておくべきである。「流動資産」と「流動負債」の数字は最低限毎日確認しておくべきだ。

最近では、数万円でパソコン用の「会計ソフト」が購入できるので経営者にはありがたい。

古くには三種の神器といえは伊勢神宮の神体となつている「八咫鏡」(やたのかがみ)と熱田神宮の神体で「天叢雲剣」(アメノムラクモノツルギ)と、皇室に伝えられる「八咫瓊勾玉」(ヤサカニノマガタマ)だといふ。今日では、会社経営に必要な三種の神器といえは「電話(ファックス)」「コピー機」「パソコン(会計ソフト)」と云えるのだろう。

特に、パソコンに搭載するソフトの中でも、経営者が自分の机に設置するパソコンには「会計ソフト」がインストールしてあることが重要だ。太古の昔から鏡が大切であったように、「会計ソフト」を経営の道具として日常的に活用することが大切だ。

「会計ソフト」は会社の健康状態の「鏡」を映し出す「鏡」でもあるからだ。私達は、ごく当たり前に毎日のように鏡を見ています。今日の自分のよ

現在の顧問税理士に少しでも不満のある社長は、すぐにでも契約を解除して新たな税理士を見つけてもらうのがいいのだ。主治医との信頼関係は何よりも大切なことから、信頼できないモヤモヤした何かがあるのであれば、腹を割って話し合いをするべきだ。胸襟を開き、経営者自身が自分のすべてを晒け出してこそ信頼できる関係の第一歩が気づける筈だからだ。

新会社法の制定と相まって、「会計参与制度」が中小企業の中でも取り入れられるようになるのも間近だ。税理士が「会計参与」という身分でその企業の財務状況や経営の事業計画などを精査した上で経営の将来性や安定性に対し「太鼓判」を押してもらえ、融資も容易になるといふことにもなるだろう。

税理士は会社の主治医だと思いが、税理士は経営者ではない。また、税理士は、経営指数に對しては、かなりシビアに捉える分析手法を身につけている。相性の良い税理士とタッグを組み、経営の実践的専門家としてのネットワークを持つていくことはこれからの経営に不可欠の条件になるだろう。



情と昨日の自分は何か違っていないか?。変わらないことを確認したり、明日はどうなるのか?。鏡は微妙な変化を映し出し感じさせてくれるのです。これでいいのだ。これは大変だ。と気づかせてくれるのも鏡です。この時、「マズイ!」と感じたらすぐに医師に診断して貰います。この時の診療所が「会計事務所」ではないだろうか。

「会計事務所を選択する時代だ! 自分に合った主治医を選べ!

現在、顧問税理士に少しでも不満のある社長は、すぐにでも契約を解除して新たな税理士を見つけてもらうのがいいのだ。主治医との信頼関係は何よりも大切なことから、信頼できないモヤモヤした何かがあるのであれば、腹を割って話し合いをするべきだ。胸襟を開き、経営者自身が自分のすべてを晒け出してこそ信頼できる関係の第一歩が気づける筈だからだ。

新会社法の制定と相まって、「会計参与制度」が中小企業の中でも取り入れられるようになるのも間近だ。税理士が「会計参与」という身分でその企業の財務状況や経営の事業計画などを精査した上で経営の将来性や安定性に対し「太鼓判」を押してもらえ、融資も容易になるといふことにもなるだろう。

税理士は会社の主治医だと思いが、税理士は経営者ではない。また、税理士は、経営指数に對しては、かなりシビアに捉える分析手法を身につけている。相性の良い税理士とタッグを組み、経営の実践的専門家としてのネットワークを持つていくことはこれからの経営に不可欠の条件になるだろう。

情と昨日の自分は何か違っていないか?。変わらないことを確認したり、明日はどうなるのか?。鏡は微妙な変化を映し出し感じさせてくれるのです。これでいいのだ。これは大変だ。と気づかせてくれるのも鏡です。この時、「マズイ!」と感じたらすぐに医師に診断して貰います。この時の診療所が「会計事務所」ではないだろうか。

陽はまた昇る...どんな人の心にも...

「夢を削りながら～年老いてゆくことに... 気がついた時はじめて気付く～空の青さに...」谷村新司が歌う『陽はまた昇る』（昭和54年）の歌い始めの歌詞だ。

32歳で事業を興し、大きな夢を抱きひたすら「働き蟻」のように忙しく働きつづけ事業に邁進してきた男がいた。男は夢を膨らませながら毎年高い売上目標に挑戦し事業を拡大してきた。売上金額は右肩上がり順調に推移したかに見えた。設立から10年後は年商30億円だった。...が、その男の経営する会社は倒産した。男が42歳の時だった。

男は決意した。もうこの業界には戻らない...!。いや戻りたくない...と考えた。

支えてくれた多くの人の期待を裏切ってしまった。一人になりたかった。遠く人影の見えない何処かへ行って、真っ白な時間が欲しかった。果てしなく続く原野の霧の中に小さく消えゆく自分の姿を見たような気さえていた。

山歩きをしていた十代の頃、やっとのことで辿り着いた山頂から見える青空に光る白くたおやかな峰々を思い出し、空を見上げ毎日のように雲の流れに魅入っていた。

男は、やり場のない空虚な心に「このままではいけない。何とかしなければ...」と思い始めたある日、知人から「信州の諏訪にある会社に行って手伝って欲しい...」とのお誘いをいただいた。

その会社に行って何をしたらいいのか漠然としたまま、毎週水曜日に一泊二日の日程で諏訪の会社に通うことになった。都会の雑踏を離れ信州の山々を眺めながらの諏訪への道程は短くさえ感じられた。

男は、その会社に行ってみて驚いた。社長は...年がら年中出張で、会社にいるのは1ヶ月に4～5日ぐらいなのだ。男は、つい数ヶ月前の自分を見ているようにさえ感じた。直感的に感じられるものがあった。これはまずいぞ...。会社の経理はほとんど従業員任せだった。そして、すごい物を見てしまった。会社の実印が2つあったのだ。社長が代表印を持ち歩いているので緊急の時に困るからと経理担当者用にもう1つ代表印あったのには唖然

リスク・カウンセラー奮闘記

とした。約1年半の間お世話になった、お手伝いすると言うよりも多くのことを学ばせて貰った。

いま振り返ってみると、その時に声をかけてくださった方の暖かい配慮だったのだ...と涙を浮かべて語った。その頃に、諏訪の街角から聴こえてきた歌が『陽はまた昇る』だ。

その歌から「沈んだ太陽は必ず昇ってくる!」いや「陽はまた昇るために沈むのだ...」というメッセージを感じ取っていた。この歌詞を歌い始めると今でも涙が止まらなくなるのだ。

身をもって体験した者は... 「透視めがね」を正しく使う...

会社が倒産したことも、家を失ったことも、今は遠い過去の大変な出来事である。でもそれは、男にとってそれは何にも代え難い『人生の宝物』でさえある。

その宝物とは、自分が身をもって体験したことと同じような状況で苦しむ人の姿が見えるように...と神様から授かった『透視めがね』のような物と言えるものだ。

男は稲妻のような光の衝撃に揺り動かされハタと気がついた。でも、過去の失態を隠し続ける人ではなく、失態を自省する人にこの『透視めがね』を授け託されるように思われる。そして、神様は、授けた『透視めがね』が正しく使われているかどうかを『困った人』の姿になって男の前に現れ、その仕事ぶりを確かめているようでもある。

男はある時から、途方に暮れて困っている人々に対し、その身を挺して接して行こうとする「使命感」や「勇気」のような不思議な大きな力が与えられたと言っていた。

男にとっては、意気消沈して俯いて過ごしている人々に出会ったら、必ず「希望の陽が昇る」と言う想いを伝え、その人が再起への階段を踏めるようにサポートすることが生き甲斐なのだ。

男は学んだ。人生の中でチャンスをつかむと言うことは、網を張って湧いてくるものではないのだ。むしろ、小さな実績を積み重ねていくことがチャンスの土壌を育てることにつながるのだ...と。

さあ!今日もすばらしい朝がやってきたぞ。

黄金色に輝く朝陽に向かって顔を閉じる。顔を通して真っ赤な血潮の色がいっぱいになるとなんだか幸せな気持ちになる。

～ああ～生きてるとは～燃えながら暮らすこと～

同じようなトラブルでも人によって悩みの感じ方やリスクは大きく異なることを見逃してはいけないのだ。

男はリスク・カウンセラーとして、例えどんなに小さな悩みごとであってもきちんと対応すると誓いを立てた。



事務所近くの「根津神社」はツツジの名所だ。

R.F.C Information & Report・第016号 2005.04.26 Vol.2005-04

◇発行者 株式会社ホロニクス総研 〒113-0033 東京都文京区本郷1-35-12 かんだビル7階

◇責任者 代表取締役・リスクカウンセラー 細野 孟 士 (DZC05310@nifty.com)

◇連絡先 Phone(03)5684-0021 Fax.(03)5684-0031 <http://homepage1.nifty.com/holonics>

【ホロニクス】(英: Holonic) 全体(ホロス)と個(オン)の合成語。すなわち組織と個人が有機的に結びつき全体も個人も生かすような形態をいう。生物は個々の組織が自主的に活動すると同時に独自の機能を発揮する一方でそうした個が調和して全体を構成する(小学館「カタカナ語の事典」より)